
真剣で闇を恋しなさい！！

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で闇を恋しなさいっ！！

【Nコード】

N2451BA

【作者名】

Scarlet ZoomAir After The Fainail

【あらすじ】

真剣恋の二次。主人公最強系。だが弱点（？）あり。

prologue (前書き)

見切り発車…

あれ？私過去つてよく知らないような……もしかしたら飛ばすかも
……それか最初の過去編はオリジナルストーリーかな？

prologue

はじめまして……とだけは言っておこう。

俺の名前は『凱戦^{ガイセン} 鷲^{ヌエ}』。転生者だ。俺の名前は親につけられた。だから厨二病だとかは言わなくてくれると助かる。

さて、まず今の状況を言おうか。

今、俺は本当の家から遠く離れた街のとある門の前に捨てられている。所謂捨て子状態な訳だ。

別に恨んだりはいしていないがな。俺は神に特典として『万華鏡車輪眼』と『アニメや漫画に出る武術や技を使えること』、『ステータスMAX』をもらっている。

つまり、俺の力の一端を見てしまった両親は俺を恐れて捨てた。それも川神市の武道の総本山とされる川神院の門の前に捨てられたという訳だ。

人は自分とは違う者や力を見ると本能的に恐怖心を持つことが多い。だから俺を捨てるのは当たり前の結果だといっていいだろう。逆に川神院の門前まで運んでもらったのだ。感謝したいぐらいだ。因みに俺はまだ0歳だ。あの川神鉄心なら俺の力を見抜いて引き取るだろうから衣食住は安泰だ。

後はこの世界を楽しむだけだな。

む？

門から老人が……なるほど。彼が川神鉄心だな。凄まじい気だ。

「捨て子か？……っ！？なんとっ！凄まじい気の量じゃ……それにこやつの眼も……とにかく中に入れるとしようかの……ん？」

なにかを見つけた鉄心はそれを手に取ろうと、俺が入れられているダンボールに手を伸ばす。

「こやつの名前と……本？本は後で見るとして……完全に捨て子じやな。普通なら孤児院に渡すのじゃが、こやつ^の気の量と眼なら孤立するのは目に見えておる……仕方がない。家で引き取るかのう……」

決断はええなじいさん。まあ助かるがな。これからよろしく頼むぜじいさん。すでに万華鏡車輪眼は開眼してるからあんた達の技、盗ませて貰うぜ？

あ、因みだが……俺の万華鏡車輪眼はうちはマダラが弟の車輪眼を移植して完成させた万華鏡車輪眼だから失明はしないぜ。でも、風間ファミリーに入ってから使った^びに視力が低下するらしい。使^うつていうか、何故か俺の万華鏡車輪眼には発動条件があつて、その発動条件を満たしてしまうと勝手に発動してしまうみたいなのだ。その発動条件は『ダメージを受けること』。もちろん自発的に万華鏡車輪眼を発動することはできるけど、ダメージを受けると強制的に発動してしまう。とは言っても発動するのは洞察眼だけだが。洞

察眼だけだが万華鏡車輪眼が発動していることには変わらないから視力は下がりますがね。

つまり、俺は大和が百代の師弟になる時までには色々技を覚えなければならないということになるな。

ってことはそれまで修行の毎日になるわけだ。……バレないように気のコントロールの練習しとこ。

真剣でき之話

へろー。

やつのことで小学生になった。まったけ……赤ちゃんプレイとやらは疲れるな。あまりにも嫌すぎて泣いたりしなかったら鉄心に自我があるってバレル寸前までいっちまった。あれは危なかったな。

因みに俺は3歳ぐらいから川神院で特訓させて貰ってる。ああ、ほとんどん吸収させて貰ったぜ。3歳で一回したらできましたくじや昔から川神院に通っている僧に悪いから一回二回間違えてからだけだな。

どうやらその心遣いがじいさんと『ルー・イー』師範代……またの名をルウ吾郎と名付けてみる。……渾名は吾郎さんだな。……怒られそうだから中国でいいか？ダメ？まあ、どっちでもいいが。――と『釈迦堂シヤカドウ 刑部ギョウブ』師範代……渾名は強面さんだ。……にはバレちまったみたいだ。なにあいつら、バケモンですか？

しかし、それよりも驚いたのは俺の給食のデザートデザートの桃ゼリーを勝手に食おうとしているこいつ。

「百代、お前は誰の桃ゼリーを食べようとしてんだ？」

「鵜の다가？」

「……今日は一人で寝る。」

なんか知らんが騒いでいるこいつ『川神^{カウカミ} 百代^{モモヨ}』だ。

なんとあの川神百代と同年代なんだぜ？俺はてっきり風間ファミリ
ーの面々と同年代かと思ってたからな。初めて会ったときはビク
リしてじいさんがボケたのかと勘違いしちまったぐらいだからな。
……あの時のじいさんの顔は笑えたぜ。

そんなこんなで俺は学校からさっさと帰ることにする。もちろん百
代も一緒に。

あ、一応桃ゼリーの件は許してやった。抱きついてきてまで許して
くれていったきたからな。役得役得。

「で？お前はいつまで俺の部屋で過ごすつもりだ？」

「鵜が居る限りだ。」

「……即答かよ。」

そうなのだ。何故かこいつ、俺の部屋に私物を置いて俺にくっつい
て離れない。寝るときも、部屋からでるときも、トイレに行くとき
もついてくる。

なに？こいつ本当にあの百代ですか？別に好戦的でもないし……訳

が分からん。ていうか軽くストーカーじゃね？てかおもったり。

「……今日も一緒に寝るのか？」

「当たり前だ」

そついいながら抱きついてくるな馬鹿野郎。胸が当たってるんだよ。

……なんだかんだいっても許す俺も俺だがな。

言い忘れていたが俺はカラコンとかはつけていない。普通に万華鏡車輪眼をさらけ出している。

当然だが……虐めにあつた。虐めの理由なんか適当でいいし、俺はみんなと眼が違つし、容姿端麗な百代といつも一緒にいるんだ。良い標的になつた。

ま、普通に凄んだら逃げていくけどな。勇気があるやつは殴りかかつてくるから一発殴られてから殴り返す。その時に一発は一発だ。なんて言つたら周りの奴らも恐れて虐めてこなくなつただけだな。

百代の方にも俺を引き離そうとする動きがあつたが、そういうことが嫌いな百代だ。普通に殴つてた。

そんなことを続けていると何故か『川神の双頭』とか厨二病な渾名がついちまった。風間ファミリー入隊フラグが立つちまったつうことだな。

真剣で式之話

とうとう高学年になっちまった。

これを記念して前々から着々と技を考えていた技を我流の武術、『凱戦流戦闘術零式』っていう名前にして作ってみた。

因みにネタでやってみたらできたアニメとかの技を『凱戦流戦闘術壹式』にして、零式と壹式を改造した技を『凱戦流戦闘術式』として扱ってる。別に言葉にしなくても良いのだが、面白いの言うことにした。

そして、じいさんや中国、強面、百代に百人組み手の時に見せてみたら

「『凱戦流戦闘術壹式・壹之型・嵐遁【雷雲腔波】』
らんどん・らいうんくわは

「なんと……その歳で自身の流派を作ってしまうとは……」

「規格外ネ。バグってるヨ。」

「おもしれえじゃねえの。俺と死合いしてみねえかあ?」

「流石は私の鶴だっ!」

とか言われた。

誰がお前のだ。後、死合いと勘弁だから。中国黙ってる。じいさん……あんただけが普通の反応だよ。ありがとう。

ていうか技名長い。面倒すぎるだろ。壱之型はNARUTOネタって決めてやってみたけど……百人組み手の相手である僧達みんな気絶しちゃった。

かわいそうに……今度から普通に戦おうかな……

「じいさん、今日の鍛錬は終わったからちょっと散歩してくる。」

「おお、わかった。遅くならんうちに帰ってくるんじゃないぞ?」

「ああ、保証はできねえが……適当に帰ってくる。」

「……お主、守る気ないじゃろ。」

……無視無視。

ここで「ああ、ねえけど？」とかいっただら散歩行けねえしな。適当に「はい」って答えたらいい？

俺、正直者だから無理だ。

戯れ言だけど。

「待て鵠。せめて腕組ませろ。」

……ランニングでもするかな。瞬歩でも使おうかと本気で考えた俺は悪くはない。

「なんだ？追いかけてこか？よし、なら私が捕まえたらキスしてやる。」

捕まりたくなつた俺は悪くないっ！！

「やめた。キスしたいなら勝手にしろ。俺は早く『あそこ』に行きたいんだ。」

「また行くのか？まあ、私も鵜とイチャイチャできるから良いんだけどな。」

「たまに先客がいるけどな。まあ、居ても関係ないが。」

今から行くのは近くの河原だ。俺はそこで寝ることが好きで、よく行く。それに百代もついてくるというだけだ。いつもついてくるけど……甘えん坊には困ったもんだ。可愛いから良いけどな。

結局、帰ったのは8時くらいになった。

「早く帰るように言ったじゃろうがっ！」

「ああ。保証しないって言ったろ？じゃ、お休み。」

言ってなかったが、俺の部屋は川神院の離れだ。飯も自分で作って食べている。まあ、俺だけじゃなくて百代と一緒に作ってる訳だが……材料は二人のお小遣いを俺が管理して、商店街の人たちに安く売ってもらっている。

子供特典って……最高だよな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2451ba/>

真剣で闇を恋しなさいっ！！

2012年1月8日19時50分発行